

《ジェネラリスト BOOKS》 トッランナーの感染症外来診療術

羽田野義郎, 北 和也(編)

神戸大大学院教授・感染治療学

岩田健太郎

本書を置いておけばたいい大丈夫。 信頼できる外来感染症診療の最新テキスト

以前からそうであったが、日本の臨床研修の最大の弱点(の一つ)は外来診療教育にある。外来でどういう患者にどう振る舞い、どのような検査をオーダーして、どのような治療を提供するか、きちんと教育されている医師は非常に少ない。多くは「先生、そろそろ外来入らない? わからないことがあったら質問してくれればよいから」とある日突然、外来で放置される。よって、その診療は我流となり、やっつけ仕事となる。

しかし、入院患者のマネジメントがそうであるように、外来患者のマネジメントにもまた原則、プリンシプルというものが存在する。我流でプリンシプルを身につけるのは非常に困難だ。そして、プリンシプルを教えてもらわないと、外来診療が、実はとても難しいという事実すら理解されないままに外来診療が継続して行われる。惰性で検査をオーダーして薬を処方するだけなら、誰にでもできるからだ。高頻度のモニターができない外来診療はある意味入院診療よりも難しい。そのことに気付かずに漫然と外来に入っている医師は多い。「わかっていないことがわかっていない」ソクラテスの無知の知的な問題は、日本の外来診療に暗い影を落としている。深刻な問題だ。

さて、そこで本書である。本書を読んでまず思ったのは、「もう外来感染症について本を書かなくてもよくなったな」である。端的に言えば世代交代の時期、ということだ。

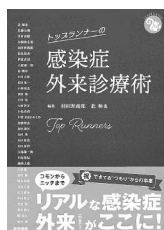
僕はいろいろな本を書くけれども屋上屋を架す「前にもどこかで見た」テキストを書くのは嫌いだ(無駄だから)。しかし、外来セッティングにおける信頼性の高い感染症テキストはなかった。前述のように日本の外来診療の教育上の課題は多く、感染症においてもそれは例外ではない。だから「外来感染症」の本を執筆してきた、のだから僕は僕の本は無用の長物だと思う。

題名通りこの領域の「トッランナー」たちが

執筆した本書は、多数の執筆者がいるにもかかわらず質が高く、検査などの最新の情報も満載で信頼できる。「信頼できる」ことが教科書において最も重要なファクターである。それは、これだけ多くの人が質の高い外来感染症診療を論ずることができるようになったという意味だ。時代の流れを感じざるを得ない。

本書では風邪や尿路感染などの外来でよくみるコモンな感染症だけでなく、レプトスピラ症など「見逃したくないニッチな感染症」もきちんと網羅している。だから、よく見る問題の対応法修練としても、めったに遭遇しない「こういうときはどうするんだっけ」のリファレンスとしてもとても役に立つ。本書一冊あれば、外来診療はたいい大丈夫だ。

検査については、単に「こういう検査がある」と羅列するのではなく、各検査の価値やコストも論じていて、こういう点も本書の信頼度を上げている。さらに素晴らしいのは治療である。日本の学会ガイドラインはしばしば治療法の選択が杜撰だが、本書においては中耳炎において「経口カルバペネムは使わない」と明記し、尿路感染でのキノロンの使用に警鐘を鳴らし、髄膜炎の治療法にやはりカルバペネムを選択させない。臨床感染症がわかっている人の書いた文章だということがすぐにわかる。そういう点でも本書は信頼できる。本当によい教科書が出てきたものだと思われしく思う次第である。



●A5/頁 356/2019 年
定価：本体 4,200 円＋税
[ISBN978-4-260-03633-7]
医学書院 刊